

11月19日(金)日本規格協会東北支部セミナールームにおいて第179回研究会が開催され、事務的報告・検討の後、以下の3事例についての検討が行われた。「QE関連情報の提供」(KTS&C 菊池富男)：以下の3項目について報告があった。10月16日に中国の昆山で行ったMTシステムに関する講演のアンケート結果。フリーソフト(VECTOR社)のアクセス状況について。シミュレーションを使ったパラメータ設計・許容差設計プログラムの紹介；報告者のホームページおよびVECTOR社にフリーソフトとして提供している標記プログラムについて。「QEの取り組みを継続するために」(アルプス電気(株) 宇井友成)：11月度のNMS研究会参加報告(代理報告)。「品質工学が継続しないのはなぜか」というテーマをもとに議論がされた。「T法(1)についての相談」(セイコーインスツル(株) 佐藤啓)：重回帰分析とT法(1)との比較、T法(1)における単位空間の意義、T法(1)の数理の3項目について議論。T法(1)と重回帰分析との差別化は、データが少なくても解析を行うことができるかどうかを最も大きなポイントである。データが少なくても解析ができるT法(1)は、より源流向けの考え方であり、そこでもっと活発に活用されるべきである。ただし、T法は今後も発展していく余地があり、単位空間の意義の議論も含め、様々な角度から研究・検討してモディファイしていく必要があるとの意見も挙げた。

(東北リコー(株) 常松薫 記)

12月22日(水)日本規格協会東北支部セミナールームにおいて第180回研究会が開催され、事務的報告・検討および谷本勲品質工学会副会長の講演の後、以下の3事例についての検討が行われた。「情報提供・フリーソフトの紹介」(KTS&C 菊池富男)：中国で品質工学を展開してゆくため、研究会の設立が検討され、立ち上げる準備をはじめているとのこと。初年度の目標は、会員数100名以上、本部は上海大学になる模様。報告者のホームページおよびVECTOR社にフリーソフトとして掲載中のソフトについて紹介があった。「直積配置型許容差設計」((株)リコー 細川哲夫)：2010年度大会で発表した「直積配置型許容差設計」のその後の研究結果が報告された。従来から光学設計で利用されてきた1因子実験による影響度調査と、直積配置法による結果を比較し、優位性を検証している。「コンタクトプローブピンの機能性評価」((株)ケーヒン 井上俊之)：大量に使用されているコンタクトプローブピンの評価方法を確立することが目的。コンタクトプローブピンの機能をフックの法則およびオームの法則として検討した結果が紹介された。「ワイヤ放電加工に対するパラメータ設計適用法の検討」(宮城教育大学 小野元久)：ワイヤ放電加工における高精度・高速度加工技術加工技術獲得のための加工条件の最適化を大目的とした研究。ここでは、ワイヤ放電加工に対するパラメータ設計適用法ならびに、ワイヤ放電加工におけるパラメータ設計を展開するための計測特性値について検討した結果が報告された。

(宮城教育大学 小野元久記)